

観客席より

平成16年度創作劇奨励公演
『それどころでない人』

2005年7月13日、17日
於・俳優座劇場

今年度はじめて文化庁・日本劇団協議会主催の創作劇奨励公演にとり組みました。『それどころでない人』は文化庁舞台芸術創作奨励賞で3度目の佳作受賞となった畠祐美子氏の作品。文学座の西川信廣氏の演出で、ベテラン若手入り混じったパワフルなメンバーでお届けいたしました。

はじめて導入したハーフチケットの効果もあり、初日から補助席が出るという、今までにない幕開きに劇団員一同大喜び！また、千種菜も立ち見が出るほどの入りでした。

全国の鑑賞会からも多数ご来場頂きました。ありがとうございました！アンケートにご協力いただいた中からいくつかご紹介させて頂きます。



『それどころでない人』
左より 水野光太・若原美紀
撮影 蔵原輝人

娯楽性たっぷりの舞台は、観ていて楽しかった。それでいて現実の社会の問題もきつちりと我々の前に提示してくれて、それぞれの問題についてしっかりと考えさせられた。

文化芸術は平和という土台に成り立つ。「戦争を知っている」世代である私どもの多くは、今の日本と世界を見ると、15年戦争の始まった1931年頃のことを思い出し、その類似性に改めて戦慄をして、演劇にも歴史に学ぶ、この大切さを期待して居ります。

(70代男性)

今回は生まれて初めて劇団の芝居を見ました。テレビではなく、間近で見る緊張感。今まで味わった事のない迫力。すべてに驚きました。一人ひとりの個性が一つの話を作っていて、とても面白かったです。見ている方ももちろん楽しめましたが団員の方々がとても楽しそうに劇をやっていたのが印象的でした。

(10代女性)

どこかで、何かでちよっとだけカギをかけ間違えて狂ってしまった夫婦の、親子の、人間の絆を、少しのガンバリでとり戻せることに気付くサマ(様子)が大変よく画けていてよかったです。

創作原作の、演出の、出演の皆さんの一生懸命に取組まれたことが、観るものに伝わってきて、すがすがしかったです。

(70代男性)

のも印象的でした。ラストの零とお母さんの抱き合うところも好き。

(20代男性)

幼少期に見ていた石井ぶく子さんプロデュースのホームドラマを見ているような感覚でほのぼのと楽しませていただきました。(途中の重々しい雰囲気は社会的なテーマでもあり、ほんとうにズンと重さを感じました)のぶちゃんとマリエさんのパジャマのシーンがきれいなあかりでした。どうして冬服なんだ...暑いぞ...と思っていたけれど、自分の中で、大きな鍋の登場と「街のどこかで」という挿入歌を聞き納得して大笑いでした。

(40代女性)

ご協力いただきありがとうございました！



『それどころでない人』右より
小島敏彦・進藤忠・弓場沙織・まきのかずこ
撮影 蔵原輝人

MESSAGE ~メッセージ~



猛暑...。戦後60年を迎えたこの夏は、厳しい暑さとともに私たちひとりひとりに様々なことを考えさせる機会・チャンスを運んできたのではないかと感じています。

歴史的事実や現実社会で起きる様々な事柄を通し、自らの意思を持ち、一歩行動を起こすことが私たちに求められていると痛切に感じたりなりません。

その一つとして 演劇をする とは何か...。私は演劇をすることを消費活動にたくはありませぬ。創造活動にしたいと思っています。またイデオロギーの代弁としての演劇をする時代でもないと思います。舞台芸術を創造していくその過程の中に、エネルギーは生まれ、観客とともにその中で増幅させ、伝え、残していくことが、私たち一人ひとりの中に確たる意思と行動を生んでいくものと信じています。現実の消費社会の中でその様な創造活動を続けることは非常に困難です。ですが、劇団の中にその思いがある限り何としても皆様

のご支援を頂きながら存続させたいと願っております。

今年の劇団活動は、3月の新進芸術家公演『わたしのジハード』。新しい力を育てる公演にすることができました。続く7月の創作劇奨励公演『それどころでない人』。新たな劇作家・畠さんとの出会いや演出の西川さんの力を借り素晴らしい創造活動をすることができました。そして9月の三越劇場 第30回記念公演『明日の幸福』。素晴らしい客演を迎え、劇団の総力を上げた公演は、笑いの絶えない楽しい舞台となるでしょう。10月、海老名演劇鑑賞会での『わたしのジハード』公演。11月には若手を中心としたアトリ公演『ノータリンベイビーズ・ノーリターン』。そして戦後60年の掉尾を飾る公演として『黙って行かせ〜Let me go〜』。人類の負の遺産である東の広島・長崎、西のアウシュビッツ。可愛い4歳になる実の娘を棄ててまでナチス親衛隊に入りアウシュビッツの看守になった母。57年という時を経て母娘が再会する壮絶なノンフィクションの舞台化。

本年は幅広い創造活動を行うことができません。この幅広い活動の中で、戦後60年のこのチャンスに様々なことを考え、自覚し、行動できればと考えています。皆様の力強いご支援を宜しくお願い申し上げます。

2005年 盛夏

劇団朋友 制作部 夏川正一

親の心子知らずノ子の心親知らず、と言いますが、親子でもお互いを本当に理解するのはとても難しい事です。もちろん夫婦でも。尾上家を始めとした幾つかの家族や夫婦が、お互いを理解し始めるストーリーは、テンポも良く、バラエティーにも富む出演者で楽しく見られました。ただ、幾つものエピソードの多さで、分かりづらいこともあったように思います。なんで零は、それほど父親に反抗するのか？和田園子は、どんないきさつで尾上家に執着するのか？壁の人を見て、お父さんが感じたお母さんの空、未完成の壁に閉じ込めたものってなんだろう？朋友の役者さん、多彩な顔ぶれですね。これからも期待しています。

「日頃の忙しさを忘れ、現実から離れた時間に行ってみよう」という思いで劇場に足を運びました。しかし芝居は家族の愛、人間のつながり、まさしく私達の日々の生活、心の憂い、思いやりを語っていたと思います。人の心の闇もかいま見たのでは？(逃避はできませんでしたが)とても楽しむことができました。

(女性)

笑えました、グッときました。登場人物が奇妙にというか複雑に関係しあっていて面白い。途中、暗転中に、両端に「零」とその父が電話を持っている場面で、何故か泣きそうになった。それぞれの対話の多くがケータイなどの電話を使っている事が象徴的で、でも舞台が昭和の名曲？が流れる「時代おくれ」な